て，植物園と博物館の文化財の荒廃を防ぐ努力をしたことで知られる．植物採集猿も彼の発明だった．ブタオザルはもともとヤシの実の採取にマレー人が使っていたが，これを熱帯の高木の花や実の採集に仕込むことを思いつき，そのいきさつと猿たちとの交流を記したのが本書である．着想というものは何の脈絡もなしに浮かんだり消えたりするものだが，それを捉えて実行してしまうのはただごとではない．採集猿は今でも使っているところがあるという．専門家によるブタオザルの解説と，訳者による著者のくわしい紹介がついている．

（金井弘夫）

□我が国における保護上重要な植物種および植物群落研究委員会植物群落分科会：**植物群落レッドデータブック** 106＋1，344＋17 pp. 1996. 日本植物保護協会・世界自然保護基金日本委員会. ¥20,500.

厚さ7.5cmある．1989年に発表された植物種のRDBに続いて，植物群落についての調査がまとめられた．何らかの保護を必要とする群落が7,492件あり，そのうち緊急な対策を必要とするものは310件である．既に壊滅してしまった群落は152件に達している．調査と解析の章と群落レッドデータの章に分けられ，後の章が最も大きく，保護について何らかのコメントをつけられた群落がすべて記録されている．県別の集計表が付いているので，関係する地域の問題点を見出すことができるようになっている．資料には問題群落とインパクトの関係表がある．最後に植物種のレッドリストもついている．

（金井弘夫）

□Hiepko, P.（ed.）：**A. Engler und K. Prantl, Die Naturlichen Pflanzenfamilien Band 17a IV. Ranunclaceae.** Authors. M. Tamura, R. Hegnauer, J. W. Nowicke, J. J. Skvaria und H. Tobe. 555 pp. 1995. Dunker & Humblot, Berlin.

1897年のEngler & Prantlの著書の新版である．5人の著者が挙げられているが，形態，染色体，分布及び分類全体など，本の内容の大部分は田村道夫氏が執筆したものである．世界の40数箇所の標本室から標本を借用して，世界のキンポウゲ科を属単位で解説し，属内のsection, seriesまで異名も引用して分類し，それに属する種類を挙げている．初版からほぼ100年，内容は著しく詳細になった．また属ごとに代表する種類の全形図と解剖図が，梅林正芳氏に依って描かれていて，内容の理解に役立っている．これだけの大きな科をよく纏めたものと思う．筆者はこの科に詳しくないのでその内容について批評する資格はないが，気になる点もある．日本のトリカブト属は全部Sect. Acontitumに属さしめ，門田氏がトリカブト属のモノグラフで区別したsectionやseriesは総てその中の異名としてしまっているが，日本のトリカブト類にはいくつかの系統があると思えるので，この扱いはやや柔軟性を欠いているように思う．属内の分類は今後検討する必要があるのではなかろうか．

（山崎　敬）

□Boyce P.: **The genus Arum** 196 pp ＋16 plates. 1993. Royal Botanic Gardens, Kew. £30.

キュー植物園からの伝統的な出版物であるKew Magazine（カーチスのボタニカルマガジン）の良さを活かしつつ，さらに植物についての記述を充実させて，植物学者にとっても園芸家にとっても価値のあるモノグラフとして計画されているKew Magazine Monographシリーズの1冊である．著者のPeter Boyce博士は若手のサトイモ科研究者で，もともとがキューガーデンの出身であるため，生きた植物に特に深い理解をもっており，2人の植物画家による精緻な図版とともにアルムの魅力を十分に引き出している．アルム属は25種がヨーロッパから西アジアにかけて分布しているが，夏蒸し暑い日本では栽培が容易ではないので，あまり馴染みのない植物であろう．しかし，こうして全体を展望してみると，アルム属としての共通性の中で色も形も様々に変化しており，園芸植物として珍重されるのもうなずける．本書は植物分類の論文としても高いレベルに達しているが，身近に置いて時々めぐって見るだけでも，伝統的な植物学に裏付けられた西洋の植物趣味を垣間見ることのできる良書としてお勧めしたい．

（邑田　仁）